

土佐の絵師、河田小龍と
『漂異紀畧』の話

奥 正敬

NHKテレビの大河ドラマ「龍馬伝」の人気で、坂本龍馬に関する本が多く読まれています。本学図書館でも江戸時代末期に書かれ、直接的もしくは間接的に龍馬に影響を与えたとされる『漂異紀畧』(写真は13頁参照)という書物が人気を博しています。昨年から複数の出版物やテレビ番組へ写真が提供され、現在もこの書物は全国の四つの博物館や資料館が順次開催する展示会に出展しています。

本書は完成当初に印行されなかったためか、著者である河田小龍という人物についても資料は少なかったのですが、昭和六十一(1986)年に高知市民図書館から原本と同じ書名を使った解説本の『漂異紀畧』(以下、解説本)が発行され、状況は一変しました。そこには、原著の翻刻をはじめ、小龍を研究する人たちによる解題と論文が収録されており、写本として流布していった状況や、「京都外語本」の起源も明らかになっています。

■小龍、絵師として見識を高める

河田小龍は文政七(1824)年に土佐の土生家の長男に生まれ、祖父の名跡である河田家を継ぎました。生涯を通じて名乗った雅号は多く、代表的なものに小梁や「川」の字を使った川田維鶴、川田半舩齋などがあります。

彼は十二、三歳のころから絵を学びはじめ、さらにその数年後から儒学を求める道に入りました。二十二歳になると江戸へ赴きますが、華やかな文物を見る中で絵の道で生きることを決意したようです。

やがて小龍は、後に藩の参政の職に就く吉田東洋に認められるようになります。東洋は大船や大砲を作り無人島を開発するとする鎖国体制下にあっては想像もしえない考えの持ち主で、小龍はこの思想に強く惹かれて行きます。東洋

に伴われた上方への旅を契機にして、小龍は弘化三(1846)年から狩野永岳の門下で伝統的な京狩野の画風を身につけます。また、筆道も修めて書の達人として名を挙げるなど、土佐の野にあつて諸学に通じた見識の高い人物になっていました。そこには、「小龍の常に主張する方針として先ず画を学ぶ者は先ず学問より入らねばならない」⁽¹⁾という持論があり、南北朝時代の楠木正成とその子正行の「桜井駅の別れ」をはじめ、中国唐時代の「玄宗皇帝遊戯之図」など画中に知識水準の高さを感じさせる作品や、凄まじい迫力がみなぎる「龍虎図」など、屏風絵や襖絵、掛け図などを数多く残しています。

■ジョン万次郎と寝食を共にして

さて、嘉永五(1852)年、この年はアメリカのペリー提督が浦賀へ来航する前年ですが、二十九歳の小龍は藩命によってジョン(中浜)万次郎の取り調べにあたることになります。

万次郎は天保十二(1841)年に乗船していた漁船が難破して鳥島へ漂着。この無人島で半年を過ごした後、アメリカの捕鯨船に救助されてマサチューセッツ州に滞在し、同船のウィリアム・ホイットフィールド船長の庇護の下、各種の教育を受けました。その結果、英語はもとより数学や航海術、さらには測量術までを修得していました。こうした彼は、ハワイを経由して嘉永四(1851)年に琉球へ戻り、長崎で取り調べを受けた後、土佐藩に引き渡されていたのでした。彼はこの時、二十六歳になっていました。

万次郎は土佐へ帰郷した仲間二名と共に取り調べられましたが、彼らは日本語を忘れており、英語交じりの片言で取り調べが捗らなかつたようです。この事態を打開するため、急遽オランダ語に精通した小龍が起用されたのですが、実際には小龍のオランダ語を以てしても役には立たなかつたのです。このため、小龍は東洋の許しを得て万次郎を自宅に連れ帰り、寝食を共にした付き合いを始めています。小龍は万次郎に読み書きを教え、自身は万次郎から英語を学んでいます。こうして、次第に意思が通じるようになったようです。